慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	聴覚障害者を対象とする高等教育におけるリベラル・アーツ：米国ギャローデット大学の歴史と現状
Sub Title	Liberal arts in higher education for deaf and hard-of-hearing people : the history and current situation at Gallaudet University in the United States
Author	原田, 早春(Harada, Saharu)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2018
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.86 (2018.) ,p.77- 92
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this paper is to analyze the current situation and issues at Gallaudet University in accordance with the institution's history. Gallaudet University has continued to provide liberal arts education and degrees such as B.A. and B.S. for deaf and hard-of-hearing students for over 150 years. The historical background and the meaning of the institution providing liberal arts for deaf and hard-of-hearing students are clarified. Furthermore, the present situation and issues that characterize Gallaudet as a liberal arts university are considered. The results revealed that Gallaudet should examine whether the institution is primarily a university or a cultural center for the Deaf community. In order for Gallaudet to function as a cultural center for the Deaf community and function as a higher education institution, the institution should actively engage in its educational contents of liberal arts and re-evaluate its B.A. and B.S. degrees as a liberal arts university.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000086-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聴覚障害者を対象とする高等教育におけるリベラル・アーツ
―米国ギャローデット大学の歴史と現状―
Liberal Arts in Higher Education for Deaf and Hard-of-Hearing People: The History and Current Situation at Gallaudet University in the United States

原　田　早　春*
Saharu Harada

The purpose of this paper is to analyze the current situation and issues at Gallaudet University in accordance with the institution's history. Gallaudet University has continued to provide liberal arts education and degrees such as B.A. and B.S. for deaf and hard-of-hearing students for over 150 years. The historical background and the meaning of the institution providing liberal arts for deaf and hard-of-hearing students are clarified. Furthermore, the present situation and issues that characterize Gallaudet as a liberal arts university are considered.

The results revealed that Gallaudet should examine whether the institution is primarily a university or a cultural center for the Deaf community. In order for Gallaudet to function as a cultural center for the Deaf community and function as a higher education institution, the institution should actively engage in its educational contents of liberal arts and re-evaluate its B.A. and B.S. degrees as a liberal arts university.

Keywords: Gallaudet University, Deaf and Hard-of-Hearing People, Higher Education in the United States, Liberal Arts, Careerism
キーワード：ギャローデット大学，聴覚障害者，アメリカ高等教育，リベラル・アーツ，キャリアリズム

はじめに

本稿の目的は，アメリカの私立大学であるギャローデット大学の歴史を踏まえ，現状と課題を分析することにある。聴覚障害者を対象とする同大学は，開学した1864年から今日までの期間において一貫してリベラル・アーツを重んじた教育を提供しB.A.やB.S.といった伝統的学位[1]を提供してきているこ

* 慶應義塾大学大学院　社会学研究科教育学専攻　後期博士課程2年

とに特徴がある。それはいかなる歴史的背景のもとで成立し，それはどのような意味を持っていたのか。またリベラル・アーツをめぐって，現在のギャローデット大学はどのような課題を有しているか。こうした問題について，同大学の年次報告書や150年史，初代学長であるE.M. Gallaudetの著書，ギャローデット大学のホームページ等をもとに分析する。

ギャローデット大学は，世界で最も早期に障害者を対象として高等教育機会を提供した機関であると位置づけられている。自らについては「世界で唯一の聴覚障害者を対象としたリベラル・アーツ・ユニバーシティ」[2]であると称している。また1988年に同大学の学長として初めてろう者を採用することを求める運動として起こったDeaf President Now movement（以下，DPN運動）は，「聴覚障害者の公民権運動」[3]として評価される。DPN運動は，いくつかの連邦法に加え，障害者にとって最も重要な差別禁止法である「障害を持つアメリカ人法（Americans with Disabilities Act: ADA）」（1990年）の成立に大きく寄与したと言われている[4]。また運動後，同大学は「ろう者社会（Deaf Community）」[5]や「ろう文化（Deaf Culture）」の中心地として世界的に認識されるようになった[6]。こうしたことからも分かるように，同大学はろう者社会の文化的中心地としての機能に加え，社会的・政治的にも大きな影響力をもつ高等教育機関である。

同大学を対象とした先行研究については，例えば開学後100年の歴史を，年次報告や理事会の記録を元に整理したAtwoodの研究[7]や，19世紀のアメリカにおける，ろう学校やギャローデット大学設立の歴史を含め，ろう者社会形成について包括的に分析したVan Cleve & Crouchの研究[8]，各著者によるエッセイをジェンダーや人種の問題等，具体的なトピックごとに分類，集約し，ろう者社会を形成する上での同大学の役割を検討したGreenwald & Van Cleveの研究[9]等が挙げられる。また上述のDPN運動は特に数多く取り上げられるテーマであり，50人以上へのインタビュー調査に基づき，DPN運動の背景や成功要因，影響を分析したChristiansen & Barnarttによる研究[10]は代表的である。このように，聴覚障害者としての権利の確立や，ろう者社会やろう文化との関わりにおける研究が同大学を対象とする研究の中心を占める。しかしながらこれらは同大学の高等教育機関としての特徴ではなく，むしろ，ろう者社会の中心地としての特徴に焦点が向けられるばかりで，いずれも限定的な特定課題を扱ったものであることを指摘できる。

他方，日本国内におけるギャローデット大学を対象とする研究については，上野益雄のE.M. Gallaudetの聾唖者観及び手話に対する基本的考え方について整理した研究[11]や，原順子によるギャローデット大学の歴史や教育理念とろう者社会との関連についての研究[12]，そして鶴田一郎[13]による障害者学生支援の日米比較の一部としてのギャローデット大学と筑波技術大学における比較研究等が主要なものとして挙げられる。国内の研究からは，同大学を対象とする研究が非常に少ない為，各邦文によってその焦点が分散していることを指摘できる。そして「リベラル・アーツ・ユニバーシティ」と称される同大学の特性を見出す研究は未だ無い。

現在アメリカにおける聴覚障害者を対象とする高等教育では，専門職業的教育やそれに準ずる専門職業的な学位の提供に対して一定のニーズが見出されている[14]。この点を相対化して鑑みた時，同大学が長年にわたり聴覚障害者を対象とする「リベラル・アーツ・ユニバーシティ」として，リベラル・アーツ教育やリベラル・アーツ学位を提供し続けてきた点は，聴覚障害者を対象とする高等教育機関としての同大学の特性であると考えられる。同大学はいかにして聴覚「障害者」に対し，リベラル・アーツ教育やその学位を提供するに至ったのか，またどのような意味をそこに見出していたのだろうか。そして

このように，同大学が150年間リベラル・アーツを重んじてきたにも関わらず，近年ギャローデット大学は，ろう者社会の文化的中心地としての性格を強めており，高等教育機関としての性格が弱まるという危機を迎えた。そのような状況の中で，開学当時見出されていた聴覚障害者に対しリベラル・アーツ教育を提供する事の意味は，今日のギャローデット大学においても同様に見出されているのか，あるいはその意味は変容してしまったのだろうか。これらの疑問から，本稿ではギャローデット大学におけるリベラル・アーツをめぐり，特に同大学の開学時の歴史をリベラル・アーツ・ユニバーシティとしての同大学の基盤として踏まえた上で，現状及び課題について検討することを，研究課題とする。

本稿の構成は以下の通りである。第一章では，ギャローデット大学の組織・構成，更にリベラル・アーツ教育とB.A, B.S.学位授与等の現状を概観する。第二章では，一節で同大学の設立背景及びリベラル・アーツ教育を提供するに至った背景を確認する。そして二節で，当時のギャローデット大学では聴覚障害者に対し，リベラル・アーツ学位を提供することにどのような意味が見出されていたのか，E.M. Gallaudetのろう教育観を基に分析し，実際に卒業生が得た進路実績とあわせて明示する。第三章では，第二章を踏まえ2006年の学長抗議運動を背景とした地域認証評価機関による注意勧告と大学改革に焦点を当て，同大学が近年直面した問題を概観する。第四章では，特に第一章から第三章を通して，同大学が聴覚障害者に対しリベラル・アーツ学位を提供するということの意味が，開学当初と比較していかに変容したのか，今後の同大学の課題と併せて考察する。

1．ギャローデット大学の現状

ギャローデット大学は，ワシントンD.C.に99エーカーの大規模キャンパスを持ち，私立大学でありながらも，開学時より連邦政府から多額の資金援助を受けている。近年ではEducation of the Deaf Act（1986年）の下，年間歳入のかなりの割合を連邦政府からの直接的資金として受け取っており，2015年～2016年の会計年度においては，その支出の約70%は連邦による支援金によって充当されている[15]。また同大学は，1957年より中央州高等教育機関委員会（The Middle States Commission on Higher Education：以下，MSCHE）[16]から認証評価を受けている他，多くのプログラムも各専門評価機関において評価を受けている。

ギャローデット大学はろう者社会の文化的中心地として，高等教育以外の学校段階においても，聴覚障害者を対象とする教育プログラムのモデル提供している[17]。その広大なキャンパスには，上述のEducation of the Deaf Actのもと，改革的なカリキュラム教材と指導技術方法を開発し，全米各地の学校に広めることを使命としたクラーク・センター（Laurent Clerc National Deaf Education Center）が設置されている。学校段階の教育はセンターの附属教育施設である，児童やその親に対し第8学年までサービスを提供するケンドール実践初等学校（The Kendall Demonstration Elementary School: KDES），そして第9学年から第12学年までを対象にプログラムを提供するモデル中等学校（The Model Secondary School for the Deaf: MSSD）において提供される。クラーク・センターは，同大学を運営していく上でも主要なディビジョンであるとされ，2015年～2016年度における会計報告では大学部門と並んで主な支出源であると述べられている。

ろう者社会の中心地としてのギャローデット大学の特徴として挙げられるもう一つの点は，教職員雇用についてである。現在，同大学の教職員雇用の半数以上は聴覚障害者を採用しており[18]，とりわけ上述のDPN運動以降，その数は増えている[19]。同様に学長を務める者も，DPN運動以降は全員がろう者

であり，学生に限らず，ギャローデット大学の組織自体がろう者によって構成された，ろう者社会の中心地であるといえる。

さてギャローデット大学はセメスター制を採用する総合大学であり，学士課程では現在約5%の聴者のみ入学を認められ，大学院は聴覚障害者，聴者の双方に開かれている。2017年～2018年度における

表1　ギャローデット大学における学位プログラム（副専攻や専門資格を含む）

学位プログラム	
学士課程（取得可能学位／副専攻／選択オプション）	前期・後期博士課程（取得可能学位／取得可能資格）
会計学（B.S.）	オーディオロジー（Au.D）
アメリカ手話（B.A.）	臨床精神保健カウンセリング（M.A.）
アート＆メディア・デザイン（B.A.）	臨床心理学（Ph.D.）
美術史（副専攻）	ろう教育（Ph.D., Ed.S., M.A.）
アスレチック・コーチング（副専攻）	アメリカ手話と英語のバイリンガル幼児ろう教育（証明書）
生物学（B.A.及びB.S.）	障害のあるろう学生への教育（証明書）
経営学（B.S.）	ろうの歴史（証明書）
化学（B.A.及びB.S.）	乳幼児と家族（証明書）
コミュニケーション学（B.A.）	神経教育学（Ph.D.）
ダンス（副専攻）	聴覚，言語及び言語科学（Ph.D.及びM.S.）
ろう者学（B.A.）	国際開発学（M.A.）
デジタル・メディア（副専攻）	通訳（Ph.D.及びM.A.）
教育学（B.A., B.S.及び5年間のB.A.／M.A.オプション）	言語学（Ph.D.及びM.A.）
英語（B.A.）	行政学（M.P.A.）
倫理学（副専攻）	学校カウンセリング（M.A.）
家族学（副専攻）	学校心理学（Psy.S.）
政治学（B.A.）	手話教育（M.A.）
グラフィック・デザイン（副専攻）	ソーシャルワーク（M.S.W.）
歴史（B.A.）	言語療法（M.S.）
情報技術（B.S.）	
国際研究学（B.A.）	
通訳（B.A.）	
言語学（副専攻）	
数学（B.A.及びB.S.）	
哲学（B.A.）	
写真（副専攻）	
レクリエーション＆スポーツプログラミング（副専攻）	
リスク管理／保険（B.S.）	
自主専攻	
ソーシャルワーク（B.A及び5年間のB.A./MSWオプション）	
社会学（B.A.）	
スペイン語（B.A.）	
スタジオ・アート（副専攻）	
舞台芸術（B.A.）	
ライティング（副専攻）	

出典）Gallaudet University“Major and Minor”より筆者作成（URL略）

学士課程の在籍者数は1,111人（内，聴者は132人）であり，大学院の在籍者数は437人（内，聴者は233人）である[20]。このように総合大学としては小規模であるが，学士課程に在籍する学生は40種類以上の主専攻からB.A.あるいはB.S.の学位の取得が可能であり，大学院ではM.A.及びM.S., Ph.D., Au.D.（聴覚学博士），その他専門資格や証明書（Ed.S.やcertificate）が取得可能である。特に学士課程では，アメリカの高等教育史においても伝統的私立カレッジが提供してきたB.A.やB.S.といったリベラル・アーツ学位が，同大学においても開学時より提供され続け，現在は豊富なコースと共に提供されている（表1）。学位プログラムを提供する組織は大きく，アーツ・アンド・サイエンシズの学士課程カレッジ（College of Arts and Sciences），教育・ビジネス・福祉スクール（School of Education, Business and Human Services），大学院（Graduate School）の3つがあり，特に学士号取得に向けたほとんどのプログラムは，アーツ・アンド・サイエンシズのカレッジによって準備されている。

また，同大学は就職においても優れた実績を誇っている。近年の卒業生の約95%は就職，もしくは大学院等に進学している。近年の卒業生は40%が教育，職業訓練，図書館，12%は医療関係や技術職，10%は地域や福祉サービス，7%は事務職や行政支援，6%はビジネスや金融関係に就職している[21]。このように，ギャローデット大学の卒業生は必ずしも専門職業的な分野ではなく，多方面にわたり活躍できていることがわかる。加えて，同大学の卒業生は，例えばビジネス系におけるIBMやMerrill Lynch, Microsoft Corporation等の世界的有名企業をはじめ，アメリカの連邦議会や省庁等の政府機関への就職も達成しており，国を担う人材として輩出されていると言えよう[22]。以上が今日のギャローデット大学の大まかな概要である。

2.　ギャローデット大学の歴史

2-1.　ギャローデット大学の設立背景とリベラル・アーツ提供の経緯

本節からは，ギャローデット大学の設立背景，そして同大学がリベラル・アーツ教育を提供することになった経緯を確認する。

19世紀初頭，アメリカにろう教育がもたらされて以来，ろう学校は基本的に全寮制であり，読み書き算数といった基礎教科と職業訓練のみが行われていた。そして，このような聴覚障害者に対する，ろう教育卒業後の知的成長の可能性の無さに対する批判から，19世紀半ば，ろう者の大学論が現れた[23]。こうした議論を背景に，実際に慈善家及び活動家であるAmos Kendallが寄付した2エーカーの土地に1857年に建設されたろう者のための教育機関であるコロンビア盲聾唖学校の大学部として，1864年，ギャローデット大学の前身が誕生した[24]。この大学部が構想され，議会で正式に設立を認める法案が可決されるまでの間は，一部の議員から，同大学が「他の古く格式の高いカレッジと同等のレベルに無いと，学位を提供するのは適切ではない。」といった意見や，「ろう者に対する施設においてろう者のために考案された適切な学位を提供する権利を与えることには賛成であるが，文学や科学の分野における学位を与えることは適切ではない。」といったろう者の知的能力に対する懐疑に基づいた反対意見が出ていた[25]。しかし最終的には上下院において法案が可決し，当時自身の最も重要な政治目標として，全ての人々に「人生において公正な機会を（Fair Chance in the Race of Life）」[26]与えることを掲げていたLincoln大統領の署名によって，今日のギャローデット大学の前身が誕生したのである。ここまでが聴覚障害者を対象とする高等教育機関の設立背景である。

では，何故ギャローデット大学においてリベラル・アーツ教育が提供されることになったのか。同大

学は開学時よりリベラル・アーツに焦点を当て，古典がカリキュラムの中心を占めていた[27]。その背景としては，上述の通り，従来のろう教育において提供されてきた3Rと職業訓練に対する批判が存在していたことが関連していたと考えられる。また，開学時より46年間学長を務めたE.M. Gallaudetが，ギャローデット大学の設立は，ろう者の学生が社会において誇りある地位を獲得できるよう，より高度な知識を目指す，という点で重要であるとしたことからも[28]，ろう者にとって「より高度な知識」としてリベラル・アーツが提供されるに至った，と考えて良いだろう。また，このような背景の他に，E.M. Gallaudetの高等教育に施したいくつかの実践もまた，同大学がリベラル・アーツを提供する間接的理由になっていることが指摘できる。

E.M. Gallaudetは，その父親であり，アメリカろう教育の先駆者であるT.H. Gallaudetが，度々ろう者の為の高等教育機関について言及をしていたこと[29]，そして自身もろう学校の教師仲間とろう者のための大学創立について語ったことがあったことから[30]，ろう者のための高等教育機関を設けることを，一つの目的として秘めていた。大学部創設時アカデミック・コースについては，アメリカのカレッジにおいて提供されていたものに対応しながらも，聾唖者独自の要望に応えるように適応させることが望ましいとされていたが[31]，E.M. Gallaudetは当時，州立のろう学校の卒業生が大学レベルの基礎学力までは充分に備えていなかったことを懸念した。そこで彼は，大学部を他の一般大学と「完全に同じ水準に保つため」[32]には学部に正式に入る前のコースとして予科課程が必要であると主張し[33]，予科課程入学後も基礎コースである英語，数学あるいは科学分野における単位の履修を必ず求めていた。また彼が学長を務めている間は，そこから大学部への入学自体が容易ではなく，出身ろう学校校長の推薦が必要であることや，入学を許可された後も一斉試験として算数，英文法，歴史，地理学，生物学，哲学，ラテン語文法（語源学と統語論に及ぶ）など徹底的に基礎学力が求められた[34]。更に，開校以来15年間は学生の受け入れもごく小規模であったことからも，大学部の入学については厳しく学生を選抜していたことが伺える。こうしたことからも，当時アメリカのろう教育は慈善家や篤志家の支援に支えられていたという背景に対し，当時のギャローデット大学では単に慈善としてではなく，当時の他のカレッジとの水準を合わせるよう徹底した教育の提供が意図されていたことが分かる。その結果，当時のギャローデット大学は，「他の高等教育機関と異なる点は，学生がろう者である，という点のみであった」[35]と評価されており，厳格な学問機関としての基礎がここに看取される。

またE.M. Gallaudetのろう者のための高等教育におけるこだわりは，学位証明書を当時のアメリカ高等教育において常習的な形式であったラテン語で記すべきであると主張したエピソードにも見出せる[36]。結果的にそれは英語で記されたが，その時期にアメリカ高等教育ではギリシャ語やラテン語といった上流階級の証とされていた知識から，英語・数学・科学及び実用的科目の分野における実践的な教育が好まれる動向があったという時代背景から見ても，E. M. Gallaudetは他の高等教育機関，とりわけ伝統的な私立カレッジを一つのモデルとして想定していたと考えられる。

ここまでを踏まえると，ギャローデット大学がリベラル・アーツ教育を提供するに至った背景として二つの経緯が考えられる。第一に，従来のろう教育における3R等の基礎教科及び職業訓練を終えた後に目指すべき，より高度な知識として，リベラル・アーツが焦点化されたという経緯である。そして第二に，E.M. Gallaudetによる思索，即ち，他の伝統的なカレッジを一つのモデルとし，ギャローデット大学が聴覚障害者を対象とする「高等教育機関」として，その学問的機関としての厳格性の保持を目指すという思索から，自然とリベラル・アーツ教育を提供することになったという経緯である。このよう

に当時のろう教育の状況と，E.M. Gallaudetが大学部に対して行った実践という二つの背景を経て，ギャローデット大学が聴覚障害者に対し，リベラル・アーツを提供するに至ったと考えてよいだろう。

2-2.　聴覚障害者に対しリベラル・アーツ教育を提供する意味

前節を踏まえ本節では，当時のギャローデット大学では聴覚障害者に対しリベラル・アーツ教育を提供する事に，どのような意味を想定していたのか，そして結果的に卒業生はどのような意味を得たのか。前者についてはE. M. Gallaudetの教育観を，後者はE. M. Gallaudetが学長を務めていた時期の卒業生の進路実績を基に分析する。

先ずはE. M. Gallaudetの教育観を基に聴覚障害者に対しリベラル・アーツ学位を提供する事に，どのような意味が見出されていたのかを分析する。但しE. M. Gallaudet自身は，大学におけるリベラル・アーツ像について直接的に言及を行っているわけでは無い。従って，ここでは「教育観」とは，彼自身の主たる関心であった，初等中等教育を含む「ろう教育」に焦点を当て，それに対する思考について概観することとする。

彼は，ろう教育の前提となる聾唖者観として，フランスのろう者教育を牽引し，人類の恩人と称されたDel'Eや，父親であるT. H. Gallaudetの考え方を踏襲している。それは，ろう者を正常な人間と見なし，「ろう」というものを異常なものとして認識していないというもので，音声で話すことが出来ない，という能力の欠如そのものは認められるものの，それが知的発達の障壁にはならず，むしろ「ろう」という状態にあった教育手段を見つけることが必要であるという立場である[37]。この教育手段こそが「手話」である。19世紀後半のアメリカでは，ろう教育における教育方法，即ち「手話法」と「口話法」が鋭く対立し，1880年のミラノ国際ろう教育会議以降，ろう学校では手話の使用が禁止され，口話が奨励されることとなった[38]。しかし，アメリカでは手話を用いて教科教育を行う事を信念としていたという背景や[39]，彼の立脚する聾唖者観に分かるように，E.M. Gallaudetはろう者に見合った教育手段としての「手話法」を重要視していた。しかし彼は同時に，「口話法」を取り入れることの重要性も掲げ，ろう教育における「併用法」という，第三の立場に立脚していたのである。この「併用法」という立場をとったことで，E.M. Gallaudetは多くの批判を浴びるが[40]，口話法の教育理念ではなく，彼自身はあくまでも手話法のそれに立っていた。手話をろう者の言語として肯定した上で，発音指導によって得られる利益を無視すべきでないとし，両者は歩み寄るものとして認識していたのだ。このように彼が手話法の理念に立脚しつつ，発音指導を無視出来なかった背後には，彼が，ろう教育を受けたろう者のゴールとして，聴者の社会に生きて，聴者との有利なコミュニケーションを図ることの出来るろう者であってほしい，といった願い[41]がある。そしてこの願いは，彼がろう教育の主たる目的として「英語」の獲得を掲げていたことにも関連しているだろう[42]。手話を操るろう者も，最終的に聴者の社会に生きていく必要がある，こうした思考は，E.M. Gallaudet自身は聴者であったが故なのかもしれないが，その「ろう教育」観こそが，本稿の観点からは重要であると考える。

ここで改めて，E. M. Gallaudetがろう者に対しリベラル・アーツ教育を提供することにどのような意味を想定していたかという問いに立ち返った時，それは聴覚障害者が聴者社会に生きる上で，リベラル・アーツが評価に値する学識となる，ということが一つの答えになるのではないだろうか。既に確認した通り，開学当初は大学部への選抜が大変厳しかったことや，聴者社会においても当時カレッジに入学できる者がそこまで多くない中，ギャローデットの学生はろう者の文化を生み出す中の「エリート」[43]

集団として認められていた。そのような時代背景の中，当時の伝統的カレッジと同様の教育内容としてのリベラル・アーツを提供する事は，ろう者が聴者社会に生きる上でも，学識のあるろう者として認識される，リベラル・アーツはそのような意味を持つものとして想定されていたのでないだろうかと推測できる。

では，そのような意味の想定のもと，結果としてギャローデット大学で学位を取得した学生はどのような意味を獲得したのだろうか。E. M. Gallaudetが学長を担っていた時代，30年足らずの間に同大学は，教師（大多数），牧師，新聞編集長・発行者，国家公務員，著名な植物学者，建築家，市議会議員，実践的な化学者，ろう学校設立者，ギャローデット大学部教授，弁護士，保険業者等を世に送り出している[44]。従来，ろう者が専門職に就く事も，社会的に出世を経験することも先ず考えにくく，良くて技術を磨き熟練工になる以外の道はなかった。また，一部の裕福な家庭の子息あるいは学業成績優秀なろう者のみが，ろう学校の教師になれたという[45]。この歴史を踏まえると，リベラル・アーツ教育を受けたろう者がこのように多様な進路を獲得しているという事実は，ろう者が肉体労働に留まる必然性は無く，専門職に必要な知力を備えていることを明らかにしたと同時に，ろう者を対象とするリベラル・アーツ教育の意味としても十分に認められる。

ここまでをまとめると，E.M. Gallaudetがろう教育において併用法の立場に立ったことの背後に，E.M. Gallaudetが聴者社会に生きるろう者を理想とするろう教育観を有しており，その観点からは聴者社会でも通用する学識という意味合いを持って，ろう者に対してリベラル・アーツを提供していたということが考えられる。19世紀半ば以降，南北戦争等を背景とする工業化の潮流から農業や機械工学等実用的な学問が求められるようになった聴者社会において，聴覚障害者にあえてリベラル・アーツ教育が提供された。この事実からは，3R等の基礎教科と職業訓練が支配的であったろう者社会という枠組みに限って，ある種エリート主義的なリベラル・アーツ観をE.M. Gallaudetは抱いていたのかもしれない。しかし一方で，聴者社会という枠組みにおいては，19世紀半ば以降，学生の知能の拡大やバランスのとれた性格を養うというリベラル・アーツの転換に伴った[46]，より普遍的な学識としてのリベラル・アーツ観を彼は抱いていたのではないか，ということも見て取れる。加えて，実際に卒業生の進路は多岐にわたり，ろう者の就職分野の充実化が達成されたと言う事実は，ギャローデット大学で取得したリベラル・アーツによってもたらされた職業的意味として充分に認識され得る。

このように，間接的にではあるがE.M. Gallaudetのろう教育観からリベラル・アーツをろう者に提供する事の意味，そして実際にギャローデット大学の卒業生が獲得した成果をその職業的意味として確認した。本稿では，リベラル・アーツ教育を提供し初めてE.M. Gallaudetが学長職を去るまでの期間を，歴史として見てきたが，同大学は150年以上リベラル・アーツ教育を重んじ，B.A.とB.S.学位を提供し続けている。開学から46年の間に得られた意味や成果は今日においても一様のものであるのか。次章以降では改めて，その視点を現状へと移していく。

3.　2006年の学長抗議運動を背景としたMSCHEによる注意勧告と大学改革

本章では2006年の学長抗議運動[47]を背景としたMSCHEによる注意勧告，そしてその対策としてギャローデット大学で施された大学改革について概観した上で，リベラル・アーツ・ユニバーシティとしての同大学に転換期が訪れたことを指摘する。

2006年にギャローデット大学でおきた学長抗議運動は，白人ろう者ではなく，バックボーンに多様

性のあるろう者を学長として求めるものであった。それは1988年に起きたDPN運動との比較において分かりやすく理解される。DPN運動は，冒頭にも述べた通り，ギャローデット大学の歴史において初のろう者の学長就任を求めた抗議運動であったため，「聴者」対「ろう者」という明確な二項対立において，そのスローガンに「ろう者の学長を，今（Deaf President Now）」を掲げていた。これに対し，2006年のろう者が学長の最終候補となったものの「ろう者として不十分である（not Deaf enough）」[48]といったフレーズが用いられ，ろう者としてのバックボーンや人種，アメリカ手話の取得時期等が争点となった。そして言うなれば，「ろう者」対「真のろう者」といった，ろう者社会特有の潜在的二項対立を背景に，そのスローガンに「より良い学長を，今（Better President Now）」[49]を掲げるものであった。同抗議運動はキャンパスの閉鎖等を伴ったため，2006年は激動の一年となったが，同年は10年に一度行われるMSCHEによる認証評価の中間評価の年でもあった。抗議運動とそれに対するマスコミ報道を受け，MSCHEは同年11月に，評価基準におけるコンプライアンスから逸脱しているとの注意勧告を出し，同大学は保護観察下に入ることになった[50]。認証評価が得られなくなる危機に立たされたのである。その理由はキャンパスの閉鎖や新学長への任命取り下げ，大学の風潮等の抗議の間におきた問題に加え，それ以前より指摘されていたガバナンスの見直し，ミッション声明及び戦略計画の不十分さ，在籍者管理の甘さ等が挙げられている[51]。またMSCHEによる注意勧告の基礎には，数回にわたる視察訪問によって度々強調されていた，同大学がMSCHEや他の高等教育機関との関連においてより活動的になるべきである，という要求があった。MSCHEの見解によると2006年の抗議運動は「ギャローデットは主として大学なのかろう者社会の文化的中心地なのか」[52]といった問いを掲げるものであった。その上で，ギャローデット大学はその両方の役割を果たせるが，全ての大学に適応できるよう，その基準に対応する必要があり，従って文化的中心地としての機能が，大学としての機能に付随されるべきであるとした[53]。このMSCHEによる指摘は，まずは同大学に高等教育機関としての機能を確立させることを要求していたと考えられる。

このようなMSCHEの注意勧告に対し，2006年の抗議運動を経て選出されたRobert Davila新学長は，早急にこれらの課題に対し，改革を急いだ。その結果2008年には再認証が認められることとなった。このMSCHEの勧告を受けた大学改革について，特に重要であったとされるものは，「学士課程のカリキュラム改革」と，「新たなミッション・ステイトメントの設定」である[54]。前者の学士課程のカリキュラム改革では，同大学のリベラル・エデュケーションの根幹を成すともいえよう，ジェネラル・エデュケーションの再編成に伴い，「ジェネラル・スタディーズ」という必修科目群の履修要件を，かつての約60単位から約40単位へと減らした[55]。また，4要素で構成される「ジェネラル・スタディーズ」の要素として「キャリア・ディベロップメント」[56]という項目を加えた点も変更点の一つである。

また後者の改革においては，新たなミッション・ステイトメントとして下記の文言が設定された。

> 1864年に連邦政府に設置認可されたギャローデット大学は，アメリカ手話と英語を通して，ろう者や難聴者の為に，知的で専門的な進歩を保証するバイリンガル，多様，多文化的な高等教育機関である。ギャローデット大学は，研究と学術活動の誇りある伝統を維持し，競争の激しい，技術的で急速に変化する世界に向けて，卒業生のキャリアの機会を準備する。[57]

ここで特筆すべき点は，先ず，ギャローデット大学が高等教育機関であるための基準として，通常の

大学においては口話コミュニケーションにおいて達成されるイングリッシュ・リテラシー（英語の読み書き能力）が，アメリカ手話においても実践されるという旨が追加，明示されたことである。更に，同大学の学生のため，卒業後の「キャリア・プリパレーション」についての言及を行い，キャリアリズムの観点をミッションにおいても導入したことも，大きな変更点であった。

ここまでを踏まえ，同大学では2006年の学長抗議運動や，他の高等教育機関との水準を図るべきであるという意見を背景とした，MSCHEの注意勧告を受け，大学改革を行ってきたことが分かった。そこで改めて注目したいのは，カリキュラム改革において，必修科目群のジェネラル・スタディーズの必要履修単位が減らされたにも関わらず，その一要素として「キャリア・ディベロップメント」が加えられた点，そして，ミッション・ステイトメントの再設定に伴い，卒業生の「キャリア・プリパレーション」が明記されたという点である。これは言い換えれば，ミッション・ステイトメント改革及びカリキュラム改革において，その双方にキャリアリズムの要素を導入することで，ギャローデット大学が高等教育機関としての立て直しを図ったということであり[58]，本稿の観点からも重要であるといえる。そして，このことはギャローデット大学が高等教育機関としての立場を維持する為には，「リベラル・アーツ・ユニバーシティ」として，聴覚障害者に対するリベラル・アーツ教育やその学位の提供を推奨するだけでは，不十分であったことを暗示している。例えば，2006年以前の同大学のミッション・ステイトメントは，下記のように記されていた。

> ギャローデット大学は世界で唯一ろう者と難聴者のためだけにデザインされたリベラル・アーツ・ユニバーシティであり，教室内外におけるファカルティ，スタッフ，学生が手話と英語をコミュニケーション手段として使用している。結果的に学生はキャンパスライフにおけるあらゆる場面に完全に参加することができ，その結果，リベラル・アーツ教育の最終目標である包括的教育と経験を獲得することが出来る。[59]

このミッション・ステイトメントが，2006年のMSCHEの注意勧告において，その不十分さから再設定が必要であると指摘を受けており，再設定後「リベラル・アーツ・ユニバーシティ」の語は除かれてしまっている。そして，引き換えにキャリアリズムの要素を新たに加えることで，高等教育機関としての立場を保とうとしたのである。カリキュラム改革について言えば，リベラル・アーツ教育を提供する同大学のコアを担うジェネラル・スタディーズにおいて，「キャリア・ディベロップメント」が履修条件として課されたこと自体，キャリアリズムが，オプションとしてではなく，今後のリベラル・アーツ教育と切り離せない要素となったことの表れであるとも言える。

このように，2006年以降は，リベラル・アーツ・ユニバーシティとしてのギャローデット大学は一つの転換期を迎えたということが指摘できる。

4.　考察

本章では，これまでの議論を踏まえ，2章でみたリベラル・アーツを聴覚障害者に対して提供する事の意味は，どのように変化したのかを考察する。そして最後に，リベラル・アーツ・ユニバーシティとしてのギャローデット大学の今後の課題を考察する。

1章において，今日におけるギャローデット大学の卒業生の就職先について言及したが，教師をはじ

めとする教育関係の割合が多い点を始め，その就職先が多岐にわたって充実しているとことから，開学時も現在においても，リベラル・アーツを得たことで結果的に伴う職業的意味については変容が見られなかった。しかしながら，本稿を通して，リベラル・アーツ・ユニバーシティとしての同大学は，大学が想定するリベラル・アーツ教育の意味を巡って，開学当初とは異なる立場を取ろうとしていることが指摘できる。2章において，同大学は開学当初，それまでろう学校で実施されていた3R等の基礎教科や職業訓練への限定性への批判に加え，B.A.やB.S.学位を提供し，その教育内容を徹底することで，他の伝統的カレッジのような高等教育機関としての立場をスタートさせたという歴史的背景があったことを確認した。また，リベラル・アーツ教育やその学位を提供する事は，聴者社会に生きる上で通用する学識を聴覚障害者が有するという意味を持つということを考察した。このような歴史に対し現在同大学においては，「リベラル・アーツ・ユニバーシティ」としての教育の充実化や，リベラル・アーツ教育の結果得られるB.A.やB.S.学位の厳格性というものは，あえて重要視されることはない。それらの意味を吟味することは放棄され，キャリアリズムの導入をもって他の高等教育機関との水準を合わせることで，高等教育機関としての立場を保とうとしている，ということが見て取れる。

このような事態は，アメリカ高等教育の動向として，リベラル・アーツ教育の需要が減少しているという事実からも指摘することが出来る[60]。しかし同大学の場合は更に，その背景に「聴者社会」と「ろう者社会」との関係性への認識の変化，というものが関連していると考察できる。その認識の変化とは，E.M. Gallaudetを始めとする「聴者の学長」と，1988年DPN運動以降の「ろう者の学長」という学長職の本質的立場の相違，加えて2006年以降の運動に見られるようにろう者社会の文化的中心地と一口に言っても，その文化内で更なる多様性を求める動きが台頭してきたことによって起こっている。つまり，開学当時のギャローデット大学のリベラル・アーツが，聴者の学長であるE.M. Gallaudetの意向で，ろう者社会に対してメインストリームである聴者社会に生きるろう者を育成する上で必要であったことに対し，今日ではろう者の学長のもと，ろう者社会そのものの文化観の変化に対応する形で，同大学が，多文化的なろう者社会に生きる，ろう者の育成を目指すようになった，ということである。今日の多文化主義的なろう者社会は，聴者社会とは異なるカルチャーを創造しているのだ。その観点からすると，ギャローデット大学の中で，多文化的なろう者社会に生きるろう者を育成するためのリベラル・アーツが改めて強調され，積極的にその意味が再評価されることは，充分に起こり得ることだろう。しかし実情としては，2006年以降，聴者社会における高等教育機関とのレリバンスを図るために，聴者社会の潮流と比例してキャリアリズムが導入され，かつて重要視されていたリベラル・アーツはかえってその存在感を弱めてしまっているのである。

では改めて，リベラル・アーツ・ユニバーシティとしてのギャローデット大学が直面し，対処すべき課題とは何であるのか。それは，先の「ギャローデットは主として大学なのか，ろう者社会の文化的中心地なのか」という問いに基づく，同大学の在り方がやはり大きく関連していると考えられる。例えば，ギャローデット大学が今後，高等教育機関としての機能に更に重点を置き，キャリアリズムの強化をもって聴者社会における他の高等教育機関とのレリバンスを図ろうとする場合，リベラル・アーツ・ユニバーシティとしての立場を失っていく恐れがある。なぜなら，近年におけるろう教育における人口動態の変化からも推測できるが[61]，必ずしもアメリカ手話と英語のバイリンガル教育というコミュニケーション環境を必要としない学生は，他の一般的な高等教育機関でリベラル・アーツ学位取得を目指すようになるためである。では高等教育機関としての機能ではなく，ろう者社会の文化的中心地として

の機能を強化する場合はどうだろうか。この場合，前提としてギャローデット大学が高等教育機関であることの必然性が揺らいでしまう可能性がある。また，ろう者にとって特有の文化を過度に主張することや，周囲を受け付けない強固な信念を執拗に掲げることによって，再び2006年のような抗議運動が引き起こされ，社会からも，他の高等教育機関からも度々ネガティブな印象を抱かれてしまう危惧もある。

このような懸念からも，MSCHEからの注意勧告等の現実的な問題に上手く対処しながら，「聴者社会」の動向に揺るがされることなく，同大学で提供されるリベラル・アーツ教育やB. A., B. S.学位の学問的厳格性の再評価をもって，同大学は高等教育機関としての機能を強化することが重要であると筆者は考える。ギャローデット大学が今日改めて，リベラル・アーツ教育やその学位を聴覚障害者に対して提供する事の意味を問い返す事は，高等教育機関としての機能のみならず，聴覚障害者に対しリベラル・アーツを提供するという特性として，ろう者社会の文化的中心地を構成する新たな機能にもなり得るためである。リベラル・アーツは，ろう者社会の中心地としての機能と高等教育機関としての機能の緊張関係やバランスを上手く保つための突破口になるだろう。

しかし一方で，ギャローデット大学は，現在その使用言語をアメリカ手話と英語のバイリンガルとし，学士課程における聴者の受け入れも極少数である。この点からは，聴覚障害者を対象とする高等教育機関として同大学は，既にメインストリームである聴者社会において主流の高等教育機関とはあえて一定の距離をとり，特殊大学としての立場を確立していることがわかる。当たり前のことではあるが，同大学はこのように他の高等教育機関との一定の距離を確保してきたが故に，聴覚障害者を対象にリベラル・アーツ教育やその学位を提供するという特性が保たれてきた，ということもまた事実である。そのことを踏まえると，同大学のアメリカ高等教育全体における特殊大学としての相対的な位置づけについても，今後慎重に検討していく必要があると考えられる。

おわりに

本稿では，ギャローデット大学が聴覚障害者を対象にリベラル・アーツ教育やB.A., B.S.学位等のリベラル・アーツ学位を150年間提供し続けてきた点を評価し，同大学がリベラル・アーツ教育を重んじる高等教育機関として誕生したという歴史的な背景とその意味について考察した。それを踏まえ，リベラル・アーツ・ユニバーシティとしての同大学の現状と課題について検討した。同大学は，ろう者社会の中心地としての機能と高等教育機関としての機能の緊張関係やバランスを上手く保つために，リベラル・アーツ・ユニバーシティとして，リベラル・アーツ教育内容や学位の厳格性について積極的に再評価する必要があるということを，現状の課題として考察した。またその際には，アメリカ高等教育全体との関係における同大学の特殊大学として位置づけについても目を向けていく事の必要性を示した。

本稿で残された課題としては，ギャローデット大学の提供するリベラル・アーツ教育内容や伝統的学位そのものの独自性を深めて検討できなかった点にある。特にデフ・スタディーズやアメリカ手話に関するB.A.学位プログラムがある点は，他の高等教育機関と比較しても特徴的であることが指摘できるため，それらを分析する価値はあるだろう。ただし本研究の課題を，「聴覚障害者」に対し，専門職業的な学位ではなく，リベラル・アーツ学位を提供する，という点に特徴を見出した立場からすれば，先ずはそれを可能とした背景や現状の困難を分析することを優先事項とするのが妥当かと考えた。ギャローデット大学を対象とする邦文の少なさからも，このことが言える。今後はその点も踏まえ，伝統的

私立カレッジ等を始めとする，聴者社会において主流の高等教育機関との相対化を視点に，リベラル・アーツ・ユニバーシティとしてのギャローデット大学について検討を続けていきたい。

注

1 本稿において「伝統的学位」とは，リベラル・アーツ・カレッジとして端を発した，ハーバード大学やイェール大学等の私立カレッジが提供してきたB.A.（Bachelor of Arts）とB.S.（Bachelor of Arts）を併せて，リベラル・アーツ学位として表すこととする。以降，両者を明確に分類することはしない。但し，自由七科を基盤としたリベラル・エデュケーションを受けた証としての性格を持つB.A.学位に対し，B.S.学位はサイエンス・スクールを新たに設立し，非教養教育である応用科学の学位としてB.A.学位とは区別されていたが，次第にその境界が曖昧になった，という歴史的経緯があったという点はあらかじめ顧慮しておきたい。吉田文「カリフォルニア大学バークレイ校のカリキュラム編成―BAとBSの違いにみる教養教育の意味」Ⅲ―5章『大学のカリキュラム改革』有本章編，玉川大学出版部，2003年，282–295頁。

2 “About Gallaudet”（accessed 30 July 2018）〈https://www.gallaudet.edu/about〉

3 Gannon, J. R., *The Week the World Heard Gallaudet*, Washington, DC: Gallaudet University Press, 2009, p. 15.

4 ジョセフ・P・シャピロ『哀れみはいらない：全米障害者運動の奇跡』秋山愛子訳，現代書館，1999年，131頁。

5 デフ・スタディーズにおいて，James Woodwardによって提案された，聴覚学的な意味で，ただ耳が聞こえないという聴覚障害の人々を指す場合は小文字のdeaf, 他方一つの言語として（アメリカ）手話とひとつの文化を共有している聴覚障害者（deaf）の特定のグループについて指す場合は大文字のDeafと表現する分類が幅広く使用される。従って，「ろう者社会（Deaf Community）」とは，Woodwardの指すDeafという概念に基礎づくものを指す。Woodward, J., “Implications for sociolinguistic research among the deaf,” *Sign Language Studies*, 1, pp. 1–7.

6 Greenwald, B. H & Van Cleve, J. V., ed., *A Fair Chance in the Race of Life: The Role of Gallaudet University in Deaf History*, Washington, DC: Gallaudet University Press, 2008, p. 181

7 Atwood, A. W., *Gallaudet College: Its First One Hundred Years*, Intelligencer Printing Company, 1964.

8 Van Cleve, J. V. & Crouch, B. A., *A Place of Their Own: The Deaf Community in America*, Washington, DC: Gallaudet University Press, 1989.（ヴァン・クリーヴ＆バリー・クローチ『アメリカの聾者社会の創設：誇りある生活の場を求めて』土谷道子訳，全国社会福祉協議会，1993年。）

9 Greenwald, B. H & Van Cleve, J. V., *op. cit.*

10 Christiansen, J. B. & Barnartt, S. N., *Deaf President Now!: The 1988 Revolution at Gallaudet University*, Washington, DC: Gallaudet University Press, 1995.

11 上野益雄「エドワードM.ガローデット（1837–1917）の聾唖者観」『研究紀要』3, 1997年，161–172頁及び「エドワード・M.ガローデット（1837–1917）の聾唖者観（続）」『研究紀要』4, 1998年，137–147頁。

12 原順子「ろう者・難聴者等への新たなまなざし（2）：ギャローデット大学にみるろう者観」『四天王寺国際仏教大学紀要』，42, 2006年，101–113頁。

13 鶴田一郎『障害者支援の日米比較―わが国における今後の方向性を探るために―』ふくろう出版，2009年。

14 例えば，アメリカではギャローデット大学の他に，聴覚障害者を対象とする高等教育機関として，ロチェスター工科大学（Rochester Institute of Technology）の一機関である，NTID（National Technical Institute for the Deaf）が存在する。NTIDは，技術的で専門的な教育を提供することで，聴覚障害者の雇用を促進することを目的とし，1965年に連邦議会において創設を認める法案が可決された。現在A.S.（Associate of Science）やA.A.S（Associate of Applied Science）といった技術系の準学士号を中心に提供するプログラムを展開しており，学士課程段階でB.A.学位を取得することが出来ない点や，全体の約30%の学生が最短で就職へと繋がるキャリア志向の準学士号プログラムに参加している点，そしてNTIDが聴覚障害者の職業教育の要請により設立したという，歴史的背景等はギャローデット大学とは異なっている。NTIDのような高等教育機関が，ギャローデット大学と並び，その立場を確立させていることを踏まえると，聴覚障害者を対象とする高等教育機関においても，専門職業的な教育内容や学位に対し一定数のニーズがあると理解することが出来る。National Technical Institute for the Deaf “History of NTID”〈http://www.ntid.rit.edu/history〉（accessed 21 May 2018）/Na-

tional Technical Institute for the Deaf Annual Report 2017, p. 29,〈http://www.ntid.rit.edu/sites/default/files/annual_report_2017.pdf〉(accessed 29 May 2018)

15 Gallaudet University, *Financial Statements Together with Peport of Independent Certified Public Accountants:Gallaudet University* (*September 30,2016 and 2015*), *p.7*,〈https://www.gallaudet.edu/Documents/Administration-and-Finance/audited-financial-statement-2016.PDF〉(accessed 21 May 2018)

16 MSCHEは，デラウェア州，ワシントンD. C.，メリーランド州，ニュージャージー州，ニューヨーク州，ペンシルベニア州，プエルトリコ，バージン諸島等の高等教育機関を対象とする地域評価機関である。Middle States Commission on Higher Education "About Us"〈https://www.msche.org/?Nav1＝ABOUT&Nav2＝MISSION〉(accessed 21 May 2018)

17 *Financial Statements*, *op. cit.* p.7

18 Gallaudet University, *ANNUAL REPORT OF ACHIEVEMENTS October 1, 2016-September 30, 2017 FISCAL YEAR 2017*, p. 27,〈https://www.gallaudet.edu/Documents/Academic-Affairs/Annual-Reports/annual-report-FY2017.pdf〉(accessed 29 May 2018)

19 Christiansen, J.B. & Barnartt, S. N., *op. cit.*, p. 219.

20 *ANNUAL REPORT*, *op. cit.*, pp. 7–8.

21 *Ibid.*, pp. 147–148

22 Gallaudet University "After Gallaudet",〈https://www.gallaudet.edu/attending-gallaudet/after-gallaudet〉(accessed 29 May 2018)

23 ろう者を対象とする大学について，1851年に初めて提案を行ったのは，ニューヨーク州立ろう学校の教師であったVan Nostrandという聴者であった。その提案に賛同を示し，批判を加えながら本格的に大学論を打ち出したのはJohn Carlinであった。Nostrand,J.V.,"Necessity of Higher Standard of Education for the Deaf and Dumb," *American Annals of the Deaf and Dumb*, 3, 1851, pp.193–198./Carlin, J.,"Advantages and Disadvantages of the Use of Signs," *Annals*, 4, 1851

24 開学時，ギャローデット大学は「コロンビア盲聾唖学校（Columbia Institution for the Deaf and Dumb)」の大学部として，ろう者だけでなく盲者も受け入れていた。しかし，翌年の1865年1月31日，盲者である児童への教育を義務として外す法案が通過し，「コロンビア聾唖学校」としての再スタートをきることとなった。対象から外された盲者は，メリーランドの施設に配置されることとなった。Gallaudet, E.M.,"A History of the Columbia Institution for the Deaf and Dumb," *Records of the Columbia Historical Society*, Washington, D. C., 15, 1912, pp. 1–22.

25 Rives, J.C., *The Congressional Globe*, *1st Session*, *38th Congress: Senate*, (15 March, 1864) Washington: The Official Proceedings of Congress, pp.1108–1109.

26 Coogan, M.,"Gallaudet University and President Abraham Lincoln" Gallaudet Un iversity (uploaded 30 March 2010)〈http://www.gallaudet.edu/news/mr_gu_lincoln_april2010.html〉(accessed 21May, 2018)

27 Kurz, C.A.N.,"Two Views on Mathematics Education for Deaf Students: Edward Miner Gallaudet and Amos G. Draper," in Greenwald, B.H & Van Cleve, J.V., ed. ,*A Fair Chance in the Race of Life: The Role of Gallaudet University in Deaf History*, Washington, DC: Gallaudet University, 2008. p. 53

28 *Ibid*.

29 Atwood, A. W., *op. cit.*, p. 19

30 1851年代に刊行された『アメリカろう者年報』を始めとする大学論について同僚と話し合っていたとE. M. Gallaudetは述べている。Gallaudet, E. M., *History of the College for the Deaf*, *1857–1907*, Washington: Gallaudet University Press, 1983, p. 5

31 Kurz, C.A.N., *op. cit.*, p.53.

32 Gallaudet, E.M., *Eighth Annual Report of the Columbia Institution for the Deaf and Dumb*, 1865, p. 6

33 Gallaudet, E. M., 1983, *op. cit.*, p. 48.

34 Gallaudet, E. M., 1865, *op. cit.*, p. 7

35 Greenwald, B. H & Van Cleve ,J.V., *op. cit.*, p.100

36 Armstrong, D. F., *The History of Gallaudet University*, Gallaudet University Press, 2014, p.7.

37 Gallaudet, E. M., “Report of the President on the System of Deaf-Mute Institution Pursued in Europe,” 1867, p. 54.

38 Gallaudet, E. M., “The Milan Convention,” *American Annals of the Deaf and Dumb*, 26, 1881, pp. 5–6.

39 ヴァン・クリーヴ＆バリー・クローチ，前掲，107頁。

40 E.M. Gallaudetは，手話法支持者からは，アメリカ手話教育の基礎を作った父であるT.H. Gallaudetに対して親不孝であると批判され，一方で口話法支持者からも，発音指導を導入するとしながらも手話を容認すると言う姿勢が不徹底であると非難された。上野益男，前掲，139頁。

41 Gallaudet, E. M., “DEAF-MUTE” CONVENTIONS, ASSOCIATIONS, AND NEWSPAPERS,” *American Annals of the Deaf and Dumb*, Vol.18, 1873, pp. 200–206

42 Kurz, C.A.N., *op. cit.*, p. 53.

43 ヴァン・クリーヴ＆バリー・クローチ，前掲，75頁。

44 Gallaudet, E.M., 1912, *op. cit.*, p.17及びAtwood, A.W., *op. cit.*, pp. 35–36

45 ヴァン・クリーヴ＆バリー・クローチ，前掲，73頁。

46 黄福涛「アメリカにおけるiberal educationとgeneral educationについて：歴史的な考察および最近の動き」『広島大学高等教育開発センター大学論集』第41集，2010年，27–42頁。

47 本稿では，2006年の学長抗議運動の内実よりも，その結果起こった大学改革について焦点化している為，その内容については注に留めることとする。
2005年9月，先のDPN運動を経て初めてろう者の学長となったI. K. Jordanが退職を発表し，理事会の選考により2006年4月，次期学長の最終候補として当時の副学長であるJane Fernandes含む3人が決定した。3人は全員がろう者であったが全員が「白人」であった。そして最終候補が決定する直前に，学長候補になるために大学理事長を辞任した，アフリカ系アメリカ人であり博士号も取得しているろう者のGlenn Andersonが最終候補に残らなかったことを機に，選考過程の不透明さが非白人学生団体によって疑問視された。これを発端に，翌月に第9期学長として任命されたJane Fernandesのろう者としてのバックグラウンドや性格に対する批判が起こった。その結果，DPN運動と同様にキャンパスが閉鎖するまでの抗議運動に発展し，以後「2006年の学長抗議運動（Gallaudet Protests of 2006）」として認識されることとなる。最終的に同年10月には臨時会議においてFernandesの任命を取り消すことが決定し，非白人ろう者のRobert Davilaが学長に任命された。（Armstrong, D.F., *op. cit.*, p.150）同運動は，ろう者の強すぎる信念や熱意に基づいた，複数の原因で起こったものであると分析されている。（Bauman, H.D., “Postscript: Gallaudet Protests of 2006 and the Myths of In/Exclusion,” *Sign Language Studies*, 10, 2009, pp. 90–104）またその他の抗議運動の背景として，近年全寮制の伝統的環境において手話によるろう教育を受けて育ってきた児童数が25%程しかおらず，ほとんどの児童が口話による主流の教育環境に身を置いているといった，ろう教育環境の変化に対するろう者社会の今後についての懸念の大きさが，ギャローデット大学はより多くの人をろう者社会へと社会化させる主体であるという自覚をもたらせたと仮定する者もいる。（Christiansen, J. B., “The 2006 Protest at Gallaudet University: Reflections and Expectations,” *Sign Language Studies*, 10, 2009, pp. 69–89.）

48 *Ibid.*, p. 150

49 Christiansen, J. B., *op. cit.*, pp. 85–86.

50 Armstrong, *op. cit.*, p. 152.

51 Gallaudet University, *Monitoring Report to the Middle States Commission on Higher Education*,（published 14 September 2007）〈http://ims.gallaudet.edu/pdf/20070914–0003.pdf〉（accessed 21 May 2018）

52 Armstrong, *op. cit.*, p. 158.

53 *Ibid.*, p. 159.

54 Christeiansen,*op. cit.*, p. 85

55 *Monitoring Report*, op. cit., p. 20.

56 このジェネラル・スタディーズは現行のカリキュラムに設置されており，「第1学年基礎コース」「統合コース」「キャリア・ディベロップメント」「キャプストーン・コース」の4要素で構成されている。

57 Gallaudet University “Mission and Goals”〈http://www.gallaudet.edu/academic-catalog/about-gallaudet/mission-and-goals〉（accessed 21 May 2018）下線は筆者によるもの。

[58] ミッション・ステイトメントの再設定については，本稿とは異なる視点から下記のような考察を加えることも可能である。そもそもMSCHE注意勧告は他にも，以前より課題とされていた卒業率の低さや学生数の減少に対する在籍者管理についての改善も含まれていた。若者の減少，母親から遺伝した風疹を含む聴覚障害の重要な原因の排除，伝統的にギャローデットの学生における源ともなっていた全寮制の学校からの主流プログラムへの教育の場への移行を含む，ろう者の人口動態の変化を主要な要因とし，1988年在籍者数のピークを迎えて以降，同大学では在籍者数の減少が課題となっていた。Jordan学長時にはその対応として，大学院レベルでしか受け入れてこなかった聴者を2%のみ学士課程に受け入れ，開学時より存在していた予科課程を廃止するといった方法を採用した。結果的にその対策は失敗とされながらも，2005年までに在籍者数は安定するようになった。しかし2006年の抗議運動による影響から2008年度には学士課程在籍者は再度200人も減少してしまっていたのである。（Armstrong, *op. cit*, pp. 143–145.）これを踏まえると，「キャリア・プリパレーション」を同大学の卒業生へ提供することを一使命としてミッションに明示したことが，キャリアを保障するという意味で，在籍者管理においても機能することが意図されていたと理解することも出来る。即ち，入学してきた学生に対し，卒業後のキャリアの保障を明示することによって，まとまった学生数を確保しようと試みたとも考えられる。

[59] Gallaudet University, *Annual Report: FY2006*, p. 2〈http://www.gallaudet.edu/Documents/Academic-Affairs/Annual-Reports/annual-report-FY2006.pdf〉（accessed 18 January 2018）下線は筆者によるもの。

[60] Ferrall, V. E., *Liberal Arts at the Brink*, Harvard University Press, 2011, pp. 40–59.

[61] 注47・58でも言及しているが，アメリカでは過去四半世紀にわたって，スペシャル・スクール（障害者を対象とする特殊学校）に参加するろう者や難聴者の割合は半分以上に減少している。Mitchell, R.E., & Karchmer, M.A., “Demographics of deaf education: More students in more places.,” *American Annals of the Deaf*, 151–2, 2006, pp. 95–104.